烏山地域（上北沢地区・上祖師谷地区・烏山地区）

1　烏山保健福祉センター保健福祉課

この地区展開報告会になぜ保健福祉課が？と思われる方もいらっしゃると思いますが、この後ご説明していきます。

烏山地域はほかの地域と比べ、３地区で構成されているコンパクトな地域であるため、もともと地区をまたいで活動している団体も多く、地域としてまとまりやすいところという特徴がありました。そのため、今回からシーズン２ということもあり、地区ごとではなく烏山地域として発表するということになったため、特別参加となりました。もちろん四者連携の皆さんが主役ですから、この後の各地区の発表の前につなぎ役として聞いていただければと思います。

烏山地域のテーマは、策定中の烏山地域経営方針と同じく「まちがつながる、ひとをつなぐ」です。そう、キーワードは「つなぐ」です。そのつなぐの考えを体現した活動をしているのが、これからお話しする「つなぐ烏山」です。まずはこの「つなぐ烏山」について説明し、各地区の取り組みにつなげたいと思います。

それでは、つなぐ烏山の説明をしたいと思いますが、本題に入る前に個人的な話しになりますけれども、ちょっとお付き合いください。

私は平成２年に世田谷区役所に入庁しました。33 年前のことです。まだ、携帯どころかパソコンも普及していなく、手書き、手作業、手入力の時代です。先輩から人にものを頼む時は、安易に電話で済まそうとせず、直接会ってお願いしろと指導された古臭い時代であります。おそらく、直接依頼したほうが相手の心象もいいだろうし、何より顔を覚えてもらえということだったと思います。また、最初に配属された部署が区役所第１庁舎２階にあったので、隣は今はもう無い入札控室がありました。当時は電子入札なんてもちろんありませんから、指名業者は全員入札室に集まるわけです。なので、指名日や入札日にはいつもその入札控室が満員で、業者の皆さんが「景気はどうですか」とか情報交換を盛んに行っていました。

前置きが長くなりましたが、要は、昔はどこも対面でのやりとりがメインだったということが言いたいんです。インターネットもないため分からないことがあったらまず人に聞く、またメールなどもなく情報ツールが限られていた分対面の機会が増え、必然的に皆顔なじみになるのが当たり前になり、いわば自然とつながる社会だったんですね。

逆に今はどうでしょうか？このスマホ一つで何でもできる、調べられる便利な世の中になりましたが、対面がいらなくなった半面、人とつながるのは意識して行動しないとできなくなってきたのではないでしょうか。一度も会ったことのない相手と、重要な商談や交渉を、ラインやメールだけでうまくいくなんてまずないですよね。背景として、そのような時代の変化と区民ニーズも変わっていく中で、このつなぐ烏山は生まれました。

では、このつなぐ烏山、どのような活動しているのか、具体的にみていきましょう。次をご覧ください。

このつなぐ烏山は保健福祉課と烏山地域社会福祉協議会事務所が事務局となって、各団体の代表者が集まる運営委員会にて運営しています。正式名称は絆つながる地域包括協働体つなぐ烏山です。ちなみにこの名称は運営委員会で皆さんの合意により生まれたもので、事務局が勝手に名付けたものではないです。

「つながりたいをつなぐ」、このつなぐ烏山は地域共生社会の実現に向けて、分野や世代、地区を超えて地域でつながろうとのコンセプトのもと、福祉分野だけでなく、町会自治会や商店街、教育、スポーツと、様々な分野を横断して一緒に連携していきましょうとの活動です。

ものすごくざっくり言えば、地域団体のコーディネイトです。烏山地域には多くの団体・事業者や様々な活動している方がいますが、まずはそのような団体をお互い知ってもらい、協力して活動したり、何か課題があれば一緒に考えたりして、住みやすい地域づくりに貢献できればと思っています。ゆくゆくは、団体と個人との橋渡し役もと思っていますが、まずは支援者同士のつながりから進めています。
このつなぐ烏山のモットーは、ゆるくつながるです。なので、我々事務局も先頭に立ってひっぱっていくようなことはせず、お互いフラットな立場で活動することとしています。出発が福祉分野なので、福祉団体の参加がメインになっています。

この活動の始まりは平成30年度からです。まずはできるところからやってみよう、やるからには烏山地域の特性に合わせたものと考えたところ、この地域にはほかの地域と比べ、精神に障害を抱える方が多く住んでいることから、地域の方に精神障害のことをよく知ってもらい、理解してもらってお互い住みやすいまちにしていこうとの趣旨で、まずは心のバリアフリーを進めようと活動を開始しました。
そのような考え方から、心のバリアフリー研修を開始し、支所職員向け、烏山地域の民生委員さん向けと、研修対象者を広げていきました。あわせて、分かりやすいマニュアルがあるといいねとのアイデアから、烏山地域障害者相談支援センター「ぽーとからすやま」の全面協力により、精神に障害のある当事者の方の意見も取り入れた実践マニュアルが完成しました。この実践マニュアル、受付のテーブルの上に置いてありますので、興味のある方はお帰りの際ぜひ取ってご覧ください。心のバリアフリー研修はコロナ禍においても継続して実施してきましたが、当初はほかにも対面でのイベントを考えていました。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響でやむなく中止となりました。
なかなか計画どおりにはいかず、実質、令和４年度から本格的に活動を始めています。
そういうわけで、まだまだ試行錯誤しながらの活動ですので、これからどのように活動が広がっていくのか、未知数ではあります。

主な取り組みとしてはこの通りです。最初に先ほど少しご説明した心のバリアフリー研修。この研修は主に精神障害者の方に講師をお願いしており、日ごろの生活での困りごとや、パニックになっている時はどのような心理状態なのかなど当事者目線の話しをしてもらっています。多くても20人ぐらいまでの小規模で、烏山総合支所に異動された職員、新規採用職員や民生委員さんなど支援者向けを中心に、昨年度からは区民向けの研修も行っています。講師の意見で、社会に出た直後に障害が発症する方が多いとのことで、今後教育関連など研修先を広げていきたいと考えています。
通常、このような研修でアンケートをとっても、「とても勉強になりました」ぐらいのあっさりした回答が多いんですが、この心のバリアフリー研修のアンケートは、皆さんびっしり感想を書かれるんですね。アンケートを回収する度に、反響の大きさが直に伝わってくる研修です。おかげ様で、担当者は文字起こしが大変だっていつもうれしい悲鳴をあげています。
また、この研修講師を引き受けていただいた方が、この研修をきっかけに大きな会場での講演などさらに活躍の場を広げているとの話も聞いているので、受講者、講師双方に相乗効果も生まれる意義のある研修になっているかと思います。
次に烏山交流・名刺交換会です。普段なかなか関わらない分野の人たちとも直に交流する会です。ねらいは、烏山地域で活動しているいろいろな団体を知ってもらい、顔なじみになってもらうことです。巷では異業種交流会はよくある手法ですが、行政主催で行う名刺交換会は珍しい試みかと思います。前例のない取り組みで苦労しましたが、その分やりがいもあり、参加された方からは、「このようなイベントをやるとは思っていなくて参加

してみたら期待以上だったよ」とか「多くの団体に知り合えてよかった」など、大変好評の声をいただいており、やってよかったなと思う企画になりました。

最後に、ここがつなぐ烏山最大のポイントかもしれません！名刺交換会などで知り合った団体同士をつなげるコーディネイトをしています。ここの団体と知り合いたい、コラボしたいと考えても、いきなり連絡するのは皆さん躊躇するようです。そこで事務局がマッチングのお手伝いをしています。同時に、名刺交換会など知り合うきっかけづくりは作っているので、各団体同士がもう勝手につながっていつのまにか広がっているという、目指すべき方向が実現したケースもありますが、一方軌道に乗るまでは、細かな調整やサポートが必要であるとの課題が見えてきました。ほかにも、もともとつながっていたけれどもコロナ禍で切れてしまった、向こうの担当者も変わってしまって誰に言っていいのか分からないので、事務局が仲介役になってほしいとの要望もありました。

今後、世の中がどんなにテクノロジーが進んだとしても、人と人のつながりは必要不可欠だと思っています。むしろ、つながりは福祉分野だけでなく、ほかの分野でも最も重要な視点となるのではないでしょうか。
このつなぐ烏山は今後どのような方向に進むかは分かりませんが、軸は人とのつながり、SNS などのデジタルツールも活用しながら、同じ空間、同じ時間を共有するアナログなやり方も大事に残したいと考えています。

今年６月に開催した名刺交換会です。当日は、福祉関係だけでなく、Qs-GARDEN の運営会社、町会長、総合型地域スポーツクラブ、大学、青少年委員会長、商店街等も参加されました。形式としてはグループワークを採用し、高齢、子ども、ボランティアなど、テーマごとに情報交換しました。参加表明時に交流したい団体名を聞き取っていましたので、同じグループになるようグループ分けを工夫しました。皆さん、早めに会場入りして、開始前から名刺交換で盛り上がっていました。なお、心のバリアフリー研修は、講師の要望でスタッフだけの写真しか撮っていないので、割愛させていただきます。

つながった事例の一つです。「ぽーとからすやま」の利用者の作品を展示するスペースを探しているとの声から、烏山区民センターと調整し、この烏山区民会館入口にあるホワイエでの展示が実現しました。作品を売ってほしいとの声もあったようで、大変好評な作品展でした。障害を抱える方からの相談を受ける、ぽーとからすやまの活動を広く周知するいいきっかけにもなったかと思います。

つなぐ烏山についての説明は以上です。このつなぐ烏山の取り組みが各地区へと波及し、つながりがさらに広がって、烏山地域全体が住みやすく愛着のもてるまちになればと考えています。それでは、つながり支えあう地域を目指して、３地区でのつながる取り組みを順にご説明します。

2 上北沢地区

上北沢地区は、松沢病院との連携をテーマにしています。まずは、上北沢地区の特色及び課題からご説明します。上北沢地区の特色として、地区の中央部に都立松沢病院や医学総合研究所等、東京都の敷地が広がっています。これらの都の施設を大切な地区資源として捉え、まずは松沢病院との連携を深めながら、地区課題解決のための取り組みを進めていきたいとの考えのもと、令和４年度より上北沢地区四者の各事業において、松沢病院との連携を進めています。

今年度は、上北沢地区四者と、松沢病院との情報連絡会を、年に３回実施していきます。医師、総務課、デイケア担当者に参加していただき、事業連携の可能性について広く協議しています。こちらの写真は、今年 10 月に松沢病院の体育館を借りて実施した、オータムフェスタの様子です。このように松沢病院と連携して実施した事業について、これからご紹介します。

まず、今年 10 月 28 日に開催した自由広場についてです。当日の来場者は、約 3,000 人であり、上北沢地区のイベントとしては最大のものです。令和２年度以降、コロナウイルスの影響により中止が続いておりましたが、今年は４年ぶりに開催することができました。地区活動団体及び地区内の施設・企業の関係者を中心に、出展 29 団体、協賛 26 団体のほか、ステージイベントには、地区の小学校や児童館の子どもたちを含む６団体が参加しました。

自由広場では、まちづくりセンターが運営全般を担当し、あんしんすこやかセンター、社会福祉協議会、児童館は、各ブースを出展しました。松沢病院も、健康よろず相談や、アクセサリーづくりのコーナーを出展し、当日は子どもからご高齢の方まで、多くの方でにぎわいました。自由広場の名物コーナーでもある、各団体の活動ＰＲタイム、通称「八北タイム」には、松沢病院職員も参加しました。

続いて、社会福祉協議会の上北沢縁側プロジェクト「えんがわカフェ」についてです。まず、プロジェクト発足に至った経緯として、地区内に松沢病院や中部総合精神保健福祉センターがあることから、多くの精神障害のある方が暮らしていますが、地域のイベントなどの場で精神障害のある方を見かけることは少なく、支援者に話を伺っても「当事者が地域の中に安心して過ごせる居場所が少ない」ということ。また、アンケート調査を通し、地域で暮らしている精神障害のある方の共通の困りごととして、「手作りの温かい食事を食べる機会が少ない」といったニーズがあることがわかりました。そこで、近隣施設と連携しながら障害の有無に関わらず、誰もが安心して集える居場所づくりを行うことが必要だということが課題にあがり、プロジェクトを発足しました。メンバーは、地域住民や当事者の家族、障害福祉支援事業所などのみなさまにご協力頂き、活動しています。

縁側プロジェクトでは、誰もが集える場所として「えんがわカフェ」を開設し、平成 30 年のプレ開催を経て、令和元年度より本格実施しました。令和元年度は、上北沢ふれあいの家で年３回実施し、季節に合わせたスタッフの愛情満点の料理を提供しました。参加者は精神障害のある方だけではなく、高齢者や近隣の親子など、障害の有無に関わらない世代を超えた交流を行うことができました。令和２年度以降はコロナウイルスの影響により、開催できずにおりましたが、昨年度からは松沢病院とも連携し、敷地内にある喫茶室での茶話会や、体育館でボッチャ交流会を開催。児童館にも協力いただき、参加者とスタッフで喫茶室パインの看板を作成し、プレゼントしました。昨年度は、精神障害のある方を限定として開催しましたが、今年度はどなたでも集えるような居場所づくりを再開。スタッフからは、精神障害があってもあまり構えず、自然に触れあえば良いことがわかったとの感想もいただきました。次回は、来年の 3 月に開催予定です。

また、令和４年７月１日から都立松沢病院が独立行政法人化されたことをきっかけに、地域住民と松沢病院のデイケアに通所されている方の交流を目的として、社協の特技ボランティアを派遣しています。派遣にあたり、ボランティアが安心して活動できるよう、精神科・リハビリテーション科医長より事前にオリエンテーションを実施してもらっていま

す。活動内容としては、落語や手品をはじめ、からだを動かすプログラムとしてボッチャや太極拳、ヨガ、アクセサリー作りなど、さまざまな活動を通した交流を行っています。このボランティア派遣を通して、松沢病院のデイケア利用者が地域のふれあい・いきいきサロンに参加するなど、地域活動にも結び付いています。今後、松沢病院では就労支援に力を入れていくことを受け、社協でも資格取得などを支援する地域の社会経験豊かなボランティア派遣を行っていく予定です。

こちらは、上北沢児童館の取り組みです。松沢病院の裏手には、広大な森が広がっています。緑豊かな敷地内には、ガチョウのガーコをはじめ、亀や鳥類など、様々な生き物が生息しています。この写真は、上北沢児童館の親子サークルの皆さんが、松沢病院の敷地内を散歩したときのものです。訪れた子どもたちは、初めて見る生き物に興味津々で散策を楽しみました。

令和 4 年 11 月 9 日に、あんしんすこやかセンターのいきいき講座として、「松沢病院の森を歩こう」を実施しました。こちらは、病院敷地内の緑豊かな散策路を利用してのウォーキング講座です。当日は、区民と地域の訪問看護ステーションのリハビリ専門職の総勢 29 名が参加しました。喫茶室パイン横の芝生広場で医師の話を聞いた後、グループに分かれてウォーキングに出かけました。歩く姿勢に気を付けながら、紅葉に目を細め、トカゲを追いかけて童心にかえり、池のほとりで一服。ウォーキングの後は芝生広場で整理体操を行い、体も心もリフレッシュし皆さん笑顔で解散しました。

こちらの講演会は、あんしんすこやかセンター事業でなじみのある医師から、令和４年度より始まったセンチュリアン外来広報を地元で是非行ないたい、とご相談があり実施したものです。センチュリアン外来とは、物忘れの心配がある方ならどなたでもよく、通院のたびにリハビリ運動をする外来で、介護予防の取り組みにもつながることから、あんしんすこやかセンター、まちづくりセンターで協力していくことになりました。医師、患者サポートセンター職員、まちづくりセンター、あんしんすこやかセンターで話し合い、会場は院内でなく、病院西門前の区民集会所とし、講演後は連れ立って松沢病院内まで歩き、外来で利用するリハビリ室の見学をする内容になりました。講演会は令和５年３月 10 日に実施しました。参加した方からは、「明るいイメージでびっくりした」「この外来にかかり認知症予防に取り組みたい」と好評を得ました。

ここまで、上北沢地区四者と松沢病院との事業連携についてご説明してきました。今年度より、上北沢地区では、さらなる地区資源の発掘にも力を入れています。「まちがつながる、ひとをつなぐ」を地区内で実践していくためには、民間を含む多くの団体との協力連携が欠かせません。そこで、これまでまちづくりにおいて、関わりの少なかった各施設との顔合わせ、意見交換を通じ、四者それぞれの事業における連携を深めています。

都立中部総合精神保健福祉センターや、公益財団法人大宅壮一文庫のほか、令和６年度に松沢病院敷地内への移転が予定されている広尾看護専門学校の関係者とも顔合わせを行い、今後の連携について、意見交換を進めているところです。この他、八幡山にグラウンドのある明治大学とも、防災等における連携を進めていきたいと考えております。これからも、四者連携が主体となり、上北沢地区の中で、「まちがつながる、ひとをつなぐ」のテーマを推進してまいります。

3　上祖師谷地区

上祖師谷地区のつなぐ取組みは、地区内にある至誠会看護専門学校との連携についてで

す。まず、上祖師谷の地区ビジョンは「音楽と花と文学と笑顔あふれるまち」です。これは、「音楽」は、コンサートや音楽に関するイベントが地区内で数多く実施されていること、「花」は芦花恒春園や祖師谷公園等でガーデニングや花を育てる複数のグループが活発に活動されていること、「文学」は、明治時代の文豪・徳富蘆花は、粕谷の地を好み晩年を過ごしました。徳富蘆花にちなみ、粕谷区民センターでは蘆花に関する講座を開催したり、毎年、徳富蘆花の足跡をたどるウォーキングイベントが行われたり等、徳富蘆花に関するイベント等が盛んに行われていること。イベントや団体活動を通してコミュニティ作りを進めていこう、と言うのが、上祖師谷地区の目標となっています。この活動目標の達成に向けて、四者では、それぞれで連携をして事業や取り組みを行っています。

これら事業を進めるうえで、四者側には、コミュニティづくりの推進、地域の人材の掘り起し、イベント内容のマンネリ化や関わる人達の固定化等の課題があります。対して、至誠会看護専門学校には、地域とつながりを持ちたいが、コロナ禍も影響してなかなか機会がない、学生に社会経験や多世代との交流をさせたい等の課題がありました。

コロナ禍前には、看護学校では、地域のイベントに参加したり、男の台所などの高齢者グループに看護学生が実習で参加したり等の地域との繋がりがありました。われわれ四者と看護学校の最初は、地区社協の職員がイベントに参加している看護学校の先生と挨拶をして、話をしたのがキッカケでした。最初は、看護学校の講堂などを社協のイベント会場としてお借りできないか、と言った思いがあったようですが、話をするうちに、看護学校側の地域と繋がりを持ち、学生にもっと多世代交流をさせたい、と言う思いと、新たな地域の一員として地域活動に携わって欲しい、と言う我々の思いが重なって、徐々に交流の機会が増えていきました。

学校の所在地は、仙川駅から徒歩 12 分と上祖師谷地区の中でも西寄り、調布市と隣接した場所にあります。至誠会第二病院のすぐ隣、現在は３年過程、各学年とも 30 名前後の生徒数です。

令和２年度頃より、積極的に交流を進めていこうと言う思いであったが、コロナ禍によりイベント自体の中止が続き、なかなか機会が持てませんでした。令和４年からの２年は、急に交流の機会が増えたという印象です。

本日は、この中から、「まちセン、あんすこの高齢者スマホ講座でのアシスタント」と「上祖師谷ぱる児童館、粕谷児童館での学生の受入れ」について、紹介します。

募集用チラシが２つありますが、右が令和 4 年にまちセンで行った高齢者スマホ講座のもの、左が今年あんすこで行っているものです。

開催概要です。令和４年度まちセンのスマホ講座は、各回定員 10 名を全部で５回の開催。毎回３名の看護学生にアシスタントとして協力をいただき、講師の説明やスマホを使って操作をする際に、遅れがちな方へのフォローをお願いしました。看護学生の高齢者への丁寧な接し方を見て、日頃からお客様と接しているプロの講師からも感心する声が上がる程でした。

令和５年度あんすこのスマホ相談会は、年４回開催予定で、1 回の定員は 15 名、一度に５名を受付け、1 人 40 分、個別相談形式で３回繰り返す内容。毎回３～４名の看護学生に参加してもらい、デジタルボランティアと手分けをして参加者と個別に応対し、手のかか

る参加者や学生側がつまずく様な場面では、委託している事業者がフォローに入る形式で行ないました。
　令和４年の講座以上に、参加者と接する時間も長く、より相手に合わせたコミュニケーションが必要となるので、看護学生にとっても多世代交流の経験の場となっていると思います。今後の高齢者のスマホ支援では、上祖師谷独自の取組みを進めて行ければ。まちセンでは、一定数の需要があるうちは初心者向け講座を。あんすこは、少し使える方を対象に、個人のレベルやニーズにあわせられる個別相談会を。社協は、定期的にサロン的な場を設け、デジタルボランティアとして登録している地区サポーターと一緒に、より緩やかな雰囲気の中で、スマホを学べる様な場作りが出来ればと考えています。デジタルボランティアによるサロンは、今年の９月から、月１回、試行的に開始しました。看護学生にも協力して頂き、上祖師谷地区の取組みを発展させていきたいと考えています。

　看護学校での講義と児童館の子どもたちとの交流についてお話します。看護学校との最初の接点は四者連携会議に児童館が参加した昨年度からです。まちセンをとおして協力依頼があり、協力体制へと発展しました。当時の看護学校の課題は、看護師として働く上で、子ども達の発達や現状を知り、必要な対応ができるようにさせたいとのことでした。今までの授業は、学生が近隣の公園に行き、遊んでいる乳幼児親子を遠目から観察していたそうですが、不審者に思われない様に気を使うことが大変だったようです。そのため、児童館の場で、学ぶ場面を提供してほしいという希望でした。一方児童館では、一緒に運営している新 BOP で学生アルバイトが足りていないため、学生の紹介をしていただくことで、お互いのメリットを共有してスタートしました。

　昨年度と今年度の５月に 90 分の授業時間をいただき、児童館の紹介と利用している子どもたちの様子を伝え、子ども取り巻く環境や配慮が必要な子どもの対応などをお話しました。看護学生たちは同居する家族に幼い子どもがいないこともあり、真剣に講義を聞いていました。また、看護学校がある上祖師谷地区や世田谷区の良さにも触れ、学生達が少しでも、世田谷区に興味をもってもらいたいと考えました。

　看護学校での講義終了後、秋から冬の期間に、学生達を４名から５名のグループ単位で順番に、上祖師谷地区内の粕谷児童館と上祖師谷ぱる児童館で実習授業を行いました。午前中に実習をした学生は、主に乳幼児とお母さんとの触れ合いを楽しんでいました。学生が赤ちゃんを抱っこした時のとても緊張した表情が印象的でした。学生たちは初めて赤ちゃんを抱っこした人が多く、全員がとても感動したと言っていました。また、お母さんとの会話の中で、子どもへの思いや心配事を聞くことができ、育児について考えるきっかけにもなったようです。午後に実習した学生は主に小学生、中学生との遊びに入りました。ボードやカードゲームしながら会話を楽しむ時間や、運動ができる部屋ではドッジボールやバレーボール、バトミントンなどをしました。学生たちは汗だくになりながら子どもたちに付き合いましたが、実習が終わるころには体が動けなくなっていました。学生は児童館での実習授業を通して、子どもたちが持つ特性や体力、思考、表現などについて身をもって感じることができました。また、サポートが必要な子どもの対応など学生は学んだことが大きかったようです。

　最後に募集している新ＢＯＰのアルバイトですが、現在は一つの新ＢＯＰで看護学生に働いてもらっています。四者連携を通して新しく生まれた連携をこれからも継続して行きたいと考えています。

4　烏山地区

烏山地区社会福祉協議会（以下、社協）を中心に、初めて実施した「さつまいも堀り事業」を通して地域住民の皆さんはじめ、四者、事業者が協力してまちや人がつながった事例を紹介します。

現在は世田谷区子ども計画（第２期）にあたり、多様な子育て施策の展開が求められています。なかでも「地域の子育て力の強化」の必要性があります。四者連携会議でも現状について子育て支援コーディネーター、児童館と情報交換しており、社協でも今まで以上に「子育て世帯へ目を向けていくこと」が必要だと考えていました。

そんな折、子育て事業を進めるきっかけとなったのは児童館で行われた地域懇談会でした。 地区内の子育て関係の方々が集まり情報交換を行った際にこのような意見が出ました。

〇北烏山エリアは「子育て支援機関」が少ない
〇コロナ禍で地域内での顔の見える関係が希薄
〇親子で近くに頼れる人がいない
〇子どもを見守る、助ける人が地域内に沢山いることを知ってほしい

懇談会から少し経ったころ、ＪＡさんから「『北烏山』にある農園のさつまいもほり体験の枠が少し空いたので活用してくれませんか。」と連絡がありました。地区のネットワークを活用してどのような形がよいかを考え、社協の運営委員に相談しました。また、子ども計画や懇談会で浮かび上がった地区内での子育て世帯の孤立している状況も考えた結果、地区内で子育て世帯の応援団がたくさんいることを伝えたい、そして住民同士で交流することで何かあったときに皆で支えあえるようになれば、という思いから「親子で参加」できる「子育て交流事業」として立ち上げることになりました。

始めに実行委員会を立ちあげました。初めての事業ということもあり実行委員会は社協運営委員を中心に町会・自治会、民生・児童委員、主任児童委員、日赤烏山分団、青少年地区委員の皆さんで結成しました。また、協力団体としてＪＡ、農園、保育園、小学校、子育て支援コーディネーター、ファミリーサポートにもご協力をいただきました。農園近くの保育園を通して参加募集の案内をしていただきました。農園に隣接する小学校にはトイレを借用させていただきました。どちらも懇談会や地区内のイベントでの交流がきっかけでお声がけし実現しました。

このように四者連携のほか、行政、民間関わらず地域の「つながり」を活かしたネットワークを形成し、準備を進めました。 具体的に四者連携では次のように協力しながら準備をしました。

烏山まちづくりセンターには常日頃から地区の皆さんと様々な事業を行ってきて培ったノウハウがあり、準備段階でご協力いただきました。「さつまいも堀り」は青少年地区委員会主催で毎年小学生向けに同じ農園で開催しています。参加募集の方法や物品の準備、農園との調整、今までの経験を共有していただき、事業を一緒に作り上げました。

烏山あんしんすこやかセンターにはイベントを「多世代交流」へと展開していくためにご協力いただきました。参加する親子に向けて、地域の高齢者の方々のあたたかな見守りの目があることをお伝えするために地域の高齢者の方々にご協力をいただき、子ども向けの表彰状を作成していただくことになりました。 地区内のデイサービス、フォーライフ桃

郷さんとデイ・ホーム千歳さんにご協力を仰ぎ、通所している高齢者の方々に折り紙、ちぎり絵でさつまいもを作っていただきました。 フォーライフ桃郷さんでは、細かな作業がお得意で手先の器用な男性を中心に次々と作品を作り、数日間というスピードで、予定していた数のおいもを作っていただきました。デイ・ホーム千歳さんでは、工程ごとに分担し、それぞれが得意なことに取り組んで、仕上がりにこだわって作っていただきました。高齢者の方々のご協力で合計 50 枚の表彰状が完成しました。

烏山児童館では、２～３歳児親子を対象とした「子育てサークル」の活動で、毎年さつまいも堀りをしている経験を活かし、幼児親子が安心して一緒に楽しめる行事になるようにアイデアを出してくださいました。 掘ったさつまいもをおいしく食べることも大切なポイントと考え、児童館・社協で相談しながら簡単レシピを作成することにしました。各家庭で手軽に作れること、親子で美味しく食べられることをイメージし、さつまいもスティックとスイートポテトの２品を紹介しました。イラストを入れ、参加したみなさんに、「作ってみたい！」と思ってもらえるようなレシピに仕上げました。 また、当日は子どもたちが「自分の手でさつまいもを掘り当てる喜び」を、存分に感じてもらえるようにサポートしていただきました。

当日は参加者２グループに分けて総勢 23 世帯 71 名の親子が参加しました。11 月としては季節外れの暑さになりましたが、子どもたちは楽しそうに土に触れ、大きなさつまいもを一生懸命掘りました。参加した親御さんも参加者同士や実行委員である地域の皆さんともコミュニケーションをとりながら親子で一緒に楽しむことができました。 委員さんもこれまでの経験を活かして積極的に動いてくださいました。「どうしたら子どもたちがケガをしないか」、「親子でやるにはこうしたらよいね」なども気にかけてくださいました。 また開会式では「顔見知り」から「顔なじみ」になれたらというお話もいただき、地域の皆さんで一緒に行事を作り上げましょうという雰囲気を作ってくださいました。

今回のさつまいも堀りは、農家やＪＡと地域の住民のつながりが強い烏山地区の強みを生かしたネットワークによって実現しました。まさに「世代」や「分野」を超えて、人が「つながり」まちが「つながった」ケースといえます。子育て中の親子が、地区社協運営委員を始め町会や民生・児童委員、日赤、青少年地区委員など地域で見守る人達と顔なじみになることで、今後の孤立や孤独を防ぐ土壌になるのではないのでしょうか。子どもの頃から近隣の人に見守られ助けられた経験が、大人になった時、人に頼る、助けを求める（受援力）につながっていくのだと思います。また、あんしんすこやかセンターの協力により高齢者含めた多世代交流もできました。デイサービスに通所する高齢者の方々にも「人の役に立つ喜び」を感じてもらえたと思います。 地域の子どもに対して温かいまなざしや、高齢者含めた地域で暮らす様々な世代の人が子育て世帯を見守っていることを伝えられたかと思います。こういったつながりを積み重ねていくことで、「孤立や孤独のない地域づくり」となっていくと考えます。今後も四者連携を強化し、世代や分野を超えて協力しあいながら、だれもが暮らしやすい地域づくりに向けて取り組んでまいります。

5　烏山総合支所長副支所長

烏山地域では、発表でもありましたとおり、この地域をつながり、支えあうまちとして、育てていきたいと考えています。これは、現在策定中の地域経営方針にも掲げさせていただいています。このつながるというのには、一つは、支援を必要としている方が、支援につながるということで、これを身近な相談窓口ということで、まちづくりセンターを中心とした四者連携の中で進めています。もう一つ大事なのは、支援をしている人同士がつな

がるということです。まちづくりセンターの四者連携も、やはり、フォーマル、インフォーマルの大きな支援の輪の中で、つながって支えあっていなければなりません。支所として、まずは、この地区と地域のつながりをしっかりと強固なものとしていくという意味で、今回、チーム烏山として、３つの地区、支所の保健福祉課が一体となった発表をしました。

また、最初の発表にありました、つなぐ烏山は、来年度、さらに取り組みを展開していく予定です。福祉の分野だけではなく、様々な分野や、支え手、受け手の立場を超えて皆さんとつながること、つまり、地域の方が、福祉的な課題を抱えている方に気づいて福祉の支援者へ相談したり、逆に、福祉の支援者が、福祉的な課題の解決にあたって町会自治会、商店街、活動団体など地域の方の力を借りたりということを実現するため、ワークショップ等で課題を共有することで、皆が、我が事として共生社会の実現に取り組む地域を目指します。引き続き、烏山ワンチームとして取り組んでまいります。本日はありがとうございました。